

## 共生のひろば 14・総評

岩槻 邦男（兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長）

9回目となった2014年の「共生のひろば」も、いい状態で、生涯学習に意欲的な人たちと歓びを共有することが出来ました。人と自然の博物館の連携グループや連携研究員と協働した活動を構築、展開し、その成果を公表しようとするこの事業が、今年も望ましいかたちで遂行されたことを嬉しく思います。

もちろん、この事業は2月11日の発表会というイベントだけでなく、一過性で終わるものではなく、展示発表は公開当日だけでなくさらに続けられますし、毎年欠かさず刊行されているこの記録集、報告書の刊行のための活動も、発表会当日からそのまま継続されます。この文章を見ていただく時には、展示発表も終わっていますし、記録集が無事に刊行されているときではありません。しかし、さらに、「共生のひろば」自体はそれで終結したわけではなく、次の10回目のための活動がすでに始まっているはずです。9回目を正當に自己評価し、その上に10回目の活動を展開することは、今年度の「ひろば」を正しく生かせることであり、その意味で2月11日は「共生のひろば」という長い歩みの、例年の通過点のひとつのポイントとも理解されます。

9回というのは歴史としてはまだ短いものですが、その歴史のうちでも、「共生のひろば」のプログラムは年によって少しずつ異なった展開を見せてきました。今年も、これまでの短い伝統に上積みするような堅実な貢献もありましたが、それとあわせて、これまでとすこし違う様相を見せた成果もありました。

基調講演は全9回休みなく河合名誉館長にやっていただいております。今年は、エチオピアのグリダヒヒの話を、9回目にしてはじめてパワポに編集した画像を伴った話にさせていただきました。「争うのが嫌いな平和主義のサル」というこの講演は、常識的には競争に入り、闘争を始めると理解される個体間の関係を、暴力的な闘争に解決を委ねることなく、見事に平和的な慣習によって処理して生きていくサルの具体的な生き様を紹介する話でした。先行研究の総括によって培われることになる常識の枠に、どんなことも当てはめて考えることの危険性を鋭く示唆されたもので、この年の研究発表で提起された問題をあらかじめ指摘されたものであるかのように聞かせていただきました。

口頭発表では、昨年も高校生のいい発表が目立ちましたが、今年の発表でも高校生の活躍が目立ちました。全12件の口頭発表のうち6件が高校生によるものでした。1校で3件という高校がありましたから、高校数は4校でした。発表された内容も興味を呼びましたが、発表の仕方それぞれに特徴のある展開を見せました。

高校生の取り組みは、どちらかというと研究志向のかたちで展開します。下手をすると、研究のミニチュアになりかねませんが、逆に、先行研究でつくられた学界の常識にとらわれることなく、結構大胆な発想から問題提起がなされ、解析の手法も、学界の常識の範囲を超えて展開するという特徴も見せてくれます。それだけに、出てくるデータに想定外のものもあり、聞いていて、話としては意外性が十分に楽しめる側面があります。

しかし、研究志向ということであれば、そのデータに基づいた考察には科学的な厳密さが求められ、その際先行研究によって明かされている事実にも十分意を注ぐ必要があります。自分たちの得た新しいデータによって立証されるのは何か、解明しようとした仮説はどこまで解けたか、まだわからないで残っているのは何か、科学は結論を出すのにいい加減な態度は許しません、そのきびしさを体験する必要があります。もちろん、いうまでもなく、現行の常識にそうだけで評価しようというのではなく、現在得られている科学の知見がいかに不完全であるかを、自分たちのデータを通じて確かめことが肝要です。職業的科学家が歩んでいる道と、ちょっと違う道をたどることによって得るものを模索しようということかもしれません。

もっとも、このことは他の発表にもそのまま当てはまることです。職業的な「研究者」は先行研究を詳細に検討し、何がどのようにわかっていないかを詳細に承知して、確立された手法を展開させて問題解決に挑むのを王道とします。まだ知られていないことをいかに詳細、正確に知っていることが、その道の専門家の資格とされる由縁です。「共生のひろば」は学会発表ではありませんので、そのような研究手法の完成度だけを求めるものではありません。しかし、研究志向の活動をするなら、科学のきびしさを無視することは許されません。それが科学リテラシーの向上を求めるといことでしょう。そして、それと平行して、単純な研究志向だけではない、科学する喜びを追究する生涯学習の成果というものが何か、回を重ねるごとに「共生のひろば」が模索する課題はますます大きくなってきます。

昨年、今年と、高校生の発表数は質量ともに目覚ましい向上を見せていますが、このまま高校生が「共生のひろば」を征服するような心配はないと思っています。実際、今年も、企業やNGO/NPOの人たちのすぐれた貢献もありましたし、小学生の見事な発表もありました。発表者の年齢構成も、取り上げられた課題の範囲も、見事な多様性を見せていますし、それぞれが特徴のある成果を示すものでした。また、ひととはくとの連携に年を重ねたベテランの発表もありましたが、今年初参加の発表も半分近くになりました。

ポスター発表にもまた広い範囲の方々の貢献がありました。発表当日には、展示物を前にしたホットな議論が続いて、予定通りの時間に茶話会に移れないほどの盛り上がりが見られました。発表の手法にも、さまざまな工夫が見られ、ひろばに集う人たちの意欲的なすがたが見られたことでした。

これからも、ひととはくと連携研究員、連携グループとの協働はますます緊密に、効率的になることでしょうし、連携の環自体が着実に展開することと期待しています。最近ひととはくが力を入れているキッズとの協働も、やがて「共生のひろば」に話題を提供するようになると期待しています。生涯を通じての学習の実態が、名実共にこの「共生のひろば」で見られるようになるのもそんなに先のことではないような予感があります。

個々の公表の内容については、この報告書に収録されているそれぞれの報告から学び取ることができます。14年の発表に成果をあとづけることで、15年以後の発表への展開に向けて、自分は何に取り組むか、自分にふさわしい課題を設定し、実際に問題の解明に向けての歩みを今日から始めたいものです。

